FAIRY TAIL　鍵の物語

こーこうせい

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＦＡＩＲＹ　ＴＡＩＬ　鍵の物語

【Ｎコード】
Ｎ７４８１Ｘ

【作者名】
こーこうせい

【あらすじ】
島から異世界へ飛ばされたソラ。
ついた場所は魔法の世界！！島へ戻る方法を探すためにフェアリーテイルへ！！
ソラは無事島へ帰れるのか！？
※あくまで予定ですが、たぶんＫＨ方面はほとんど進みません。悪しからず。

第一話　火竜（前書き）

どもども！こーこーせいです！！
もう一個の話が半分シリアスならこっちはハイテンションで！！

注意点！
（１）自己解釈大有り
（２）矛盾点ＭＡＸな気がしますです。
（３）クロスオーバーですがほぼＫＨ要素は皆無！！リク？カイリ？きっと元気さ！！

こんな感じですがよろしくお願いします！

無理な方は回れ右！！で、よろしくです！！

この間までネタばれみたいになっちゃったのは秘密！！今回が本編です！！

第一話　火竜

「あ、あの、お客さま？だ、大丈夫ですか？」

「あい！いつものことなので」

そこには列車に乗った桜色の髪の男と青い猫がいた。
男は今にも吐きそうな顔をしている。いわゆる乗り物酔いだ。

「無理！！！もう二度と列車には乗らん…」

「情報が確かならこの町に火竜（サラマンダー）がいるはずだよ。いこ」

「ちょ……ちょっと休ませて……」

「うんうん」

男の話をほぼガン無視して先に進む青い猫。
猫は一度も後ろを振り返ることもなく先に列車の外へ出た。そして
後ろを見て男がいないことを見て一言。

「あ、発車しちゃった」

遠いところから「た～す～け～て～」と聞こえた。

魔法

それは人々の生活に根付き、かけがえのないものになっている。
その魔法を使い職業とするものたちを人々は『魔導士』と呼ぶ。
魔導士たちは皆『ギルド』と呼ばれる場所に所属する。魔導士達は
ギルドで働きやっと一人前といえるのだ。

第一話『火竜（サラマンダー）』

「えぇ～っ！？この街って魔法や一軒しかないの？」

「えぇ、元から魔法より漁業が盛んな街ですからね」

そこにはいかにも今風な格好の女といかにも魔法！って感じの男。女の名前はルーシィ。魔法を求めいろいろな街を旅しているようだ。今いるのはハルジオンという、港町。元来から漁業が盛んでその名前は全世界に轟いている。

「はぁ、無駄足だったかしら？」

「まぁまぁ、そう言わずに見てってくださいな！新商品だってちゃんとそろってますよ？女の子に人気なのはコレ！色替（カラーズ）！！その日の気分に合わせて服の色をチェーンジ！！ってね」

「持ってるし。私は門（ゲート）の鍵の強力なやつ探してるの」

「門（ゲート）かぁ……めずらしいね！」

新商品といえど、ほんとうにこの街は魔法には疎いらしい。新商品
といっても1シーズン前のもののようだ。
しかしそんな街の魔法屋ルーシィは掘り出し物（？）を見つけたよ
うだ

「あ！白い子犬（ホワイトドギー）！！」

「そんなのぜんぜん強力じゃないよ？」

「いいのいいの！コレ探してたんだぁ！！」

それは門の鍵のなかでも最下層といっていいレベルのものだが、今
人気でなかなか手に入らない物だった。
ルーシィはそれを買うことに決めたようだ。

「おいくらかしら？」

「2万J」

あっれー？よく聞こえなかったなぁ？

「お・い・く・ら・か・し・ら？」

「だから2万J」

あまりにも高い値段にルーシィは最終手段、最終兵器を使うことにした。
自分の自慢の胸のソレをギュムッと押し上げ、誇示するように見せつけ、色っぽい声で

「おいくらかしら？素敵なおじ様？」

魔法屋の親父は眉一つ動かさなかったそうな。

◇◇◇◇◇◇◇

「ちぇー！！１０００Ｊしか負けてくなかった！！私の色気は１０００Ｊかーっ！！」

憂さ晴らしに近くのカフェの看板蹴ってみた。周りを気にしないでやっちゃったから周りの人が見てる！恥ずかしっ！！

とは思いつつも後悔はしていないルーシィだったりする。

そんなことをしながら町を歩いていると前方に人だかりができているのが目に留まる。

「なにかしら？」

そう思い人だかりに近づいていく。

「この街に有名な魔導士様が来ているんですって！！」

「火竜（サラマンダー）様よ――っ！！」

火竜（サラマンダー）！？火竜（サラマンダー）っていうと

「あ、あの店じゃ買えない魔法を操るって言う……この街にいるの！？」

魔法に関しては目がないルーシィ。すぐさま人だかりのすぐ近くまで。

「へぇーすごい人気ね……」

きっとすごい魔導士なんだろう！

そう、期待を胸に抱き覗く……

訳ではなく

「かっこいいのかしら？」

結局は年頃の女の子のようだ。

◇◇◇◇◇◇◇

「列車には2回も乗っちまうし」

「ナツ、乗り物弱いもんね」

「腹は減ったし……」

「うちら金ないもんね」

二人組み（？）のグループが街を歩く。
桜色の頭をした男がナツ、隣にいる青い猫がハッピー。

「なぁ、ハッピー。火竜（サラマンダー）ってのはイグニールのことだよなぁ？」

「うん、火の竜なんてイグニール以外思い当たらないよね」

「だよな」

ナツたちは火竜（サラマンダー）を求めこの街に来ているらしい。

「やっと見つけた！！ちょっと元気になってきたぞ！！」

「あい！！」

イグニールというのはナツの育ての親。今はナツの元から離れてしまっていて行方不明になっている。ナツはイグニールを探しにハルジオンへ来ていた。
そして噂をすれば影、目の前には「火竜(サラマンダー)さま〜！！」と叫び声が。

「ほら！！噂をすればなんたらって！！」

「あい！！！」

人だかりへ目指す一人と一匹。目的は近いようだ。

◇◇◇◇◇◇◇

ドキッドキッドキッドキッ！！

な、なんなのこのドキドキは？あたしってばどうしちゃったの？

人だかりの中に入り火竜(サラマンダー)を一目見て十秒弱、ルーシィは謎の緊張感に蝕まれていた。

ちょ、ちょっと！！あたしってばどうしちゃったのよ！？

ルーシィの方を火竜(サラマンダー)が視線を向けるだけで……

はうぅ！！！

謎のトキメキ。有名な魔導士だからなのか、それとも本当に……

そんな謎を頭に残しながら自分の欲望のまま火竜（サラマンダー）に近づいていく。

そんなところに

「イグニール！！！」

そんな声が響き、ルーシィは我に返る。

あれ？私今……！？もしかして、魔法にかけられてた！？

そして声を出した本人はというと。

「誰だオマエ」

呼んでおいて明らかに失礼なことをしていた。

◇◇◇◇◇◇◇◇

「なんだアイツは？」

自分を火竜（サラマンダー）と言う男は自分の魔法に乗ってどっかに飛んでいった。
そしてその代わりに現れたのは

「さっきはありがとうね」

金髪の女の人だった。

ーーーーーーーー

あのあとさっきの女の人、ルーシィに「御礼をしたい」ということでナツ達は飯を食いに来ていた。
そしてその飯に誘った本人はというと

「でね？でね！？ギルドって言うのは……」

店に入ってからずっと喋りまくっていた

「ほ、ほぉか……」

「よくしゃべるね」

圧倒されるナツとハッピー

自分の話したいことはすべて話したようで、ルーシィは話に火と区切るをつけるとこちら（の世界）に戻ってきた。

「そういえばあんた達誰か探してたみたいだけど……」

「あい、イグニール」

「火竜（サラマンダー）がこの街に来てるって聞いたか来て見たはいいけど別人だったな」

「火竜（サラマンダー）って見た目じゃなかったんだね……」

「見た目って……人間としてどうなのよ？」

「ん？人間じゃねぇよ？イグニールは本物の竜だ」

「……！！！？」

普通の会話から生まれる突然の真実。そこには会話についていけなくなったルーシィの姿。
かろうじて復活して言った言葉は

「そんなの街中にいるわけないでしょー！！！」

全身全霊の突っ込み

ピクっと反応するナツたち

「今気づいたって顔すんなー！！」

その後もしばらくレストラン内は騒がしかった。

◇◇◇◇◇◇◇

レストランからでたルーシィは少し休憩がてら公園のベンチに腰掛け、毎週欠かさず読んでいる週刊ソーサラーを読んでいた。

「あはははは！！！やりすぎー！！」

そこには自分が入りたいギルドの特集が。しかしそこにはギルドで起こった問題ばかり。正義の味方のようなギルドがコレでは悪役に見えるといったほどの内容だ。

「魔導士ギルド、妖精の尻尾！！最高にかっこいいなぁ！！」

しかし問題などルーシィに関係はない。ルーシィはただ単に妖精の尻尾に入りたかった。
そんなところに一人の男の声が

「へぇ、君、妖精の尻尾に入りたいんだ」

「あ、あんた！！火竜（サラマンダー）！！いっておくけど私に魅了（チャーム）は効かないわよ！！」

そこにはさっき問題になった火竜（サラマンダー）。

「いいんだ、君を今日の船上パーティに招待したくてね。君さえ来てくれればいいんだ」

「行かないわよ！！あんたみたいなえげつない男のパーティなんか！！」

「でも、君妖精の尻尾に入りたいんだろ？」

パーティの話を断っていたのに、何を言い出すんだ、といった調子のルーシィ。しかし妖精の尻尾という言葉が出た途端に顔が変わった。

「妖精の尻尾の火竜（サラマンダー）って、聞いた事ない？」

「ある！！あんた妖精の尻尾の魔導士だったの！？」

「そうだよ。入りたいならマスターに話し通してあげるよ」

目の前の男にパーティへ誘われる→その男は妖精の尻尾だった→行くしかない！！

上のような回路が形成されるまで約０．１秒。ルーシィはさっきまでの態度とは打って変わって

「素敵なパーティになりそうね！！」

完全に男の虜に。
妖精の尻尾のことを聞き、船上パーティへ行くことにした。これから起こることも知らず、ルーシィは有頂天だった。

「はっ！！！擬似魅了（チャーム）はいってた！！」

第一話　火竜（後書き）

いかがでしょうか？こんな感じで続けていこうかと思います！！
誤字、脱字、感想などはバンバンお願いします！！これから改善していきたいんで！！

では、よろしくお願いします！！

第二話妖精の尻尾（前書き）

無駄になげぇｗｗｗ
まぁ、こんな感じにソラは絡ませていきますよ～

もちろんはーとれすは登場させますし、途中から成長させますｗｗ
↑エ

誤字脱字、感想はどんどんお願いします！！

第二話妖精の尻尾

◇◇◇◇◇◇◇

夜……

ふらふらするし……正直ちょっと酔いそう……酔う？あれ！？俺って変な黒いやつらに襲われて、玉に飲み込まれて……！！？
目を覚ましたソラは周りの景色を見て驚いた。自分が知らない景色、匂い。そして

「なんで船の上？」

どこか知らない船の上にいた。
ここは船尾の方のようで人は誰もいない。扉が一つあるだけだった。

「どーすっかなぁ……」

いくらなんでもどこか分からない上に、船から飛び降りるわけにも行かない。

「まぁ、見つかったら事情話せばいっか」

と、いうことで中に入ることにした。

◇◇◇◇◇◇◇

「ルーシィか……いい名前だね」

「どぉも♪」

そこには火竜（サラマンダー）とルーシィの姿。どうやら火竜（サラマンダー）に気に入られたようでルーシィは別室に呼ばれている。

他にもパーティに呼ばれた女の子達はいるのだが、皆甲板でおしゃべり中。

ま、妖精の尻尾に入るまでこいつに愛想よくしてればいいんだけどね！

「まずはワインで乾杯といこう。口をあけてごらんゆっくりと葡萄酒の宝石がはいってくるよ」

優秀な魔導士、さらにイケメンの部類に入る火竜（サラマンダー）。そんな人に言い寄られる姿は羨まれるだろう。

しかしルーシィどっちかって言うと物事をはっきりするタイプ。簡

単に言うと、ロマンとかはあまり興味がなかったりする。だからこの状況お

うっざぁーーーーー！！！！

とか思っていたり。
しかし妖精の尻尾に入るため。ここは我慢、と口をあけた。

しかしルーシィは寸でのところでソレを振り払った。

「これ、睡眠薬よね。どういうこと？」

そう、このワインには睡眠薬が入っていた。

「ほっほーう。よく分かったね」

「勘違いしないで。私は妖精の尻尾に入りたいだけであんたの女になるつもりはないわ！」

しかしそうしたことが運のつき。

「しょうがない娘だなぁ…素直に眠っていれば痛い目みないですんだのに」

「え？」

口元をいやらしく歪ませた火竜（サラマンダー）。その視線の先には

「さっすが火竜（サラマンダー）さん」

「こりゃ久々の上玉だな」

屈強な男達が。

「あんた達何！？」

「ようこそ、奴隷船へ。他国につくまでおとなしくしていてもらうよお嬢さん」

ルーシィは騙されたことに気づいた。

「これが、妖精の尻尾の魔導士か！！最低じゃない！！」

そんな叫びはむなしく響くだけだった。

◇◇◇◇◇◇◇

「あれ？誰もいない」

船室内に入ったソラはつぶやいた。
そこには誰もいない空間と先に見えるカーテン。

「どうしよう？カーテンの向こうには絶対誰かいるよな……」

カーテンの先には揺れる影がある。あそこを通れば絶対に誰かに会うだろう。

「まぁ、いくしかないか。どっちにしろここがどこか知りたいし！」

と、言うことでカーテンの先に進んでみると……

「いやあぁぁ！！」

目の前に広がるのは、なぜか男達に羽交い絞めされている女の人。
そしてそんな女の子にあつそーな棒を押し付けようとしている男。
え？どーゆーこと？……じゃない！助けなきゃ！！
ソラは自分の状況も考えず男達を止めに入った。

「おい！何やってるんだよ！」

「――！！？ガキ！どっから入った！！」

「ガキじゃない！ソラだ！！」

「オマエ、コレを見たからにはただじゃ帰さねぇぞ？」

……あれ？これちょっとマズくない？
無計画で飛び出した自分に後悔した。

「お前ら！やっちまいな。ただ、顔はやめとけ？体（ボディ）にしとけよ？」

迫り来る男達（肉の壁）。ソラはコレで終わりか……と、思い、手を前に突き出し交差させる。

「ごがぁ！！？」

「へ？」

なぞの叫び声に気づき前を向くと吹き飛んでいる男一人と、手に握られている鍵の剣（キーブレード）。島でも役に立ってくれた自分の獲物。ラッキー！！ここでも使えるのか！！

獲物を手にしたソラは口元を軽く歪ませニヤリ、と笑った後、女の子を羽交い絞めにしている男達に襲い掛かった。

「ほっ！！はっ！！」

「くそ！コノガキがぁ！！」

軽いフットワークで男達を倒していくソラ。そんなソラに向かっている男達は右往左往している。島で鍛えられたフットワークは役に立っているようだ。
しかし相手が相手。何人もいる男達に一人で戦うには無謀すぎる。
戦力差は一目瞭然だ。
だからソラはつかまっている女の人の近くの男達だけを倒して

「お姉さん！逃げよう！！」

「わっ！！？」

女の人の手を引っ張り甲板へ飛び出した。既に離陸している船なため逃げ道は海だけだ。

「お姉さん！泳げる！？」

「泳げるけど…」

逃げようとしているソラたちに火竜（サラマンダー）が声をかけた

「おいおい、逃げ場はもうないぜ？それとも海に逃げるか？こいつらを放って、自分だけ？」

ここにはルーシィ以外にも何人もの人間がいる。そんな人たちを放っておけないソラたちは逃げることを断念して火竜（サラマンダー）のほうを向いた。

「あんた達卑怯よ！！」

「そりゃ、悪役だからな。ほら、おとなしく部屋に戻れって」

そうして火竜（サラマンダー）がソラたちに近づく。

戦うことは不可能、逃げることも封じられ、もうだめか…

そう思った二人
しかしそんな二人の目の前に

ズッシィィン！！

救世主が現れた。

◇◇◇◇◇◇◇

時間少しさかのぼり船上空

「ナツ、あそこだよ」

「おう……でもなぁ…船の上かぁ…」

「ごちゃごちゃ言わない。妖精の尻尾か確かめるんでしょ？」

「おう……ウプッ、想像しただけで酔ってきた……」

「思い出すだけで用のやめようよ。ほら、降ろすよ」

「……うし！背に腹は変えられねぇ！いくぞハッピー！！」

「あい！！」

ハッピーに体を離され落下するナツ。ナツは派手な音をたてながら船の上に着地し、

酔いで甲板に突っ伏した。

◇◇◇◇◇◇◇

「ルーシィ……と、誰？はなにやってんの？」

「ナツ、ハッピー！！？」

ルーシィが空を見上げるとそこには昼間会った二人組み

なんでこんなところに！？

「細かい話は後っぽいね。いくよ、二人とも」

「「えっ？」」

ハッピーは二人を抱えて空に飛び出すと、空高く飛び上がった。

「あの女を逃がすな！！評議員に通報されると厄介だ！！」

「へ、へい！！」

甲板からは明らかに不穏な会話。
そして銃を取り出し、こちらに撃ってきた。

「きゃぁ！！」

「うわぁ！！」

思わず頭を抱えるルーシィとナツ。そんなところにハッピーから声がかかる。

「ねぇ二人とも」

「なによ？」

「やっぱ二人は無理」

二人を抱えたハッピーごと海に落下した。

「クソネコー！！！」

「うっそおおぉ！！」

ルーシィとソラの声はむなしく消え去った。

◇◇◇◇◇◇◇

ったく、あんなのが妖精の尻尾だったなんて……っと、ソレより女の子達を助けないと…

そういって自分の鍵を探すルーシィ。

一方ソラはどこかへ泳いでいくルーシィを傍目に、おぼれかけていたハッピーを救出した。

「大丈夫か？」

「あい」

ハッピーを救出して数十秒後、ルーシィも海から頭を出す。そして

「開け！宝瓶宮の扉！アクエリアス！！」

そう叫ぶ。すると海から瓶を持った人魚が

「「すっげえええぇぇぇ！！！」」

目を輝かせるソラとハッピー。

「私は星霊魔導士よ。門の鍵を使って異界の星霊達を呼べるの。さぁ。アクエリアス！あなたの力で船を騎士まで押し戻して！！」

しかし星霊アクエリアスは

「ちっ」

「ちょっとぉ！？今『ちっ』て言ったかしらーー！！！？」

どうやら関係は良好ではないようだ。

アクエリアスによって生み出された大波は、とんでもない力で船を岸に押し戻した。
ルーシィたち諸共。

「ばかあああ！！」

ルーシィの声はむなしく消え去った。

◇◇◇◇◇◇◇

「ナツー！！だいじょ……！！」

岸に戻り再度船に入り込んだルーシィは目の前に広がるその光景に驚く。
数十人の男達がナツを取り囲むように立っていた。

「小僧……人の船に勝手に乗ってきちゃイカンだろぉ。あ？それにさっきのガキ、オマエもだ」

「俺っ！？」

ソラは驚きの声を上げる。しかしナツは何も返さず、黙って上着を脱いだ。

「オイ！！さっさとつまみ出せ」

「はっ！」

火竜（サラマンダー）の指示に二人の男がナツに歩み寄る。

「いけない！ここはあたしが……！」

飛び出そうとしたルーシィをハッピーが制す。

「大丈夫、ナツも魔導士だから」

「えっ？」

ハッピーの声にルーシィは驚きの声を上げる。
ソレに対しソラは疑問の声。

「魔導士って？」

「ほら、さっき私が星霊をよんだでしょ？そういうことができる人たち……ってあんたなんで知らないのよ！？常識でしょ！？」

「いやぁ……あはは、まぁ、後で話すよ」

話すと長くなりそうなので後で話すことにした。

「お前が妖精の尻尾の魔導士か？」

「それがどうした！？」

「よぉくツラ見せろ」

二人の男がゆっくりナツに近づく。そして顔を一瞥したナツは二人の男を纏めて殴り飛ばす。

「オレは妖精の尻尾のナツだ！！！オメェなんか見たことねぇ！！！」

「なっ！！？」

「え？妖精の尻尾！！？ナツが妖精の尻尾の魔導士！！？」

ルーシィも驚愕する。しかしナツの肩には自分が大好きな紋章、妖精の尻尾のシンボルが。

「な……！あの紋章！」

「本物だぜボラさん！！」

「バ…バカ！その名で呼ぶな！！」

火竜（サラマンダー）…もといボラがうろたえる。

「ボラ…紅天（プロミネンス）のボラ。数年前『巨人の鼻（タイタンノーズ）』って言う魔導士ギルドから追放されたヤツだね」

「あ、知ってる！！魔法で盗みを繰り返してて追放されたって言う魔導士！！」

ルーシィも知っているようだ。
ソラは何のことか分からなかったが

「とにかく、悪者ってことだな！！」

「そう！」

悪者ということは理解したようだ。

「オメェが悪党だろうが善人だろうが知った事じゃねえが、妖精の尻尾を語るのは許さねえ」

「ええいっ！！ゴチャゴチャうるせえガキだ！！！！」

ボラは得意の魔法、日の魔法をナツに放つ。

ボラが放った炎に包まれるナツ。

「ナツ！！」

「危ない！！！！」

助けに入ろうとするソラとルーシィ。しかしソレをもハッピーは制した。

「ナツに火は効かないよ」

目の前には

「まずい。こんなにまずい炎は初めてだ。オマエ本当に火の魔導士

か？」

ボラの放った火を『食べる』ナツの姿。

「「「「「「はぁ！！？」」」」」」

ハッピーを除く他全員の驚きの声。

「ふー…ごちそう様でした」

「な…なな…何だコイツはーー！！？」

「火……！？火を食っただと！！？」

火を食べたナツは、口元を歪ませると

「食ったら力が湧いてきた！！いっくぞぉぉお！！！」

ボラたちに襲い掛かった。

「ボラさん！オレぁコイツ見た事あるぞ！！！」

「はぁ！！？」

「桜色の髪に鱗みてぇなマフラー…間違いねェ！！！コイツが…本物の……」

ドゴォォォォォオン！！！！

そこから先は言う事は出来なかった。理由は簡単。ナツの炎に吹き飛ばされたからだ。

「火竜（サラマンダー）……」

ボラの部下の言葉を受け継ぐように続けるルーシィ。
ナツはというと…

「よーく覚えとけよ。これが妖精の尻尾の……」

拳に炎を纏い、ボラに向かって全力で……

「魔導士だ！！！！」

殴りつけた。
ボラは吹き飛び、船外へ。
ナツもそれを追いかけ、他のやつらをもぶっ飛ばす。
「オララララァァ！！」
すごい…すごいけど……
「「やりすぎだぁー！！（よぉー！！）」」
大暴れするのを見て泣叫ぶ（？）ソラとルーシィ。
「あい！！」
元気に答えるハッピー
「『あい！！』じゃないわよ！！ほら！！軍隊！！」
騒ぎを聞きつけた地方の警備隊が港へやってきた。
「こ、この騒ぎは何事かねーー！！！」
その言葉を聞いてか、一暴れして返ってきたナツは

「やべ！！逃げんぞ！！」

ルーシィの手を持って走り出す。

「なんであたしまでぇーー！！？」

「だってオレたちのギルドに入りてぇんだろ？」

「っ……！」

「来いよ」

ナツがルーシィに笑いかける

「うん！！！」

ルーシィは元気よく返事をして、ナツの後を追いかけた。

「あ、待ってよ！！俺も行くって！！」

ソラもそんなナツを追いかける

が、

「おめーは、誰だあぁぁ！！！」

「ふごっ！？」

ナツによって殴られ意識消沈。

「ちょっとーーーーっ！！！この人は私を助けてくれた恩人なんだからーーっ！！！」

「え？」

急いで気を失ったソラを担いで全員逃げ出した。

逃げる二人と一匹の顔はなんともいえない微妙な顔だったという。

第二話妖精の尻尾（後書き）

うん。長い割りに内容がない。
まだ漫画1話分ですよ……終わるのかね？コレｗｗ

第三話ギルド（前書き）

まぁ、序盤って事もあってそこまで進展はないです。
もうそろそろオリジナルストーリー入れていこうかなぁっておもってます。

第三話ギルド

◇◇◇◇◇◇◇

「ただいまー！！！！！！」

「ただー」

「うわぁ、おっきーい！！」

「えっと…こんちは！！」

三者三様全員異なるあいさつをして妖精の尻尾へ。

「あ、ナツ、ハッピー！おかえりなさい！」

「おう、ナツ！お前ハルジオンではまたやらかしてって……うごっ！！？」

「てんめぇ！火竜（サラマンダー）の情報嘘じゃねぇか！！！」

「あらあら、ナツが帰ってくると早速お店が壊れそうね」

「もう壊れてるよ！！？」

ワイワイがやがや……

「私、本当に妖精の尻尾に来たんだぁ…」

ルーシィはあまりのことに感激中。

ソラは

「騒がしいところだな……」

……ある意味感激中？のようだ。

第三話ギルド

えーっと…どーゆうことだ？

目の前に繰り広げられているのは妖精の尻尾のほぼ全メンバー参加の大乱闘。
こうなった理由は……なんでだろ？ここってギルド？だよね？仲間じゃないの？

◇◇◇◇◇◇◇

「ナツが帰ってきたってぇ！？」
ナツと一緒にギルド内入って約5分後、ギルドの奥のほうからやかましい足音が聞こえたと思うとそこには……

「てめぇ、この間の決着つけんぞコラ！！」
パンツ一丁の男

「あんたなんて格好してんのよ。これだから品の無い男は……」

そんな男を止めに入った人は……

「いやだわ」
大きい樽ごと酒をラッパ飲みする女

「くだらん！昼からピーピー騒ぐんじゃねぇ」
背中に『一番』と書かれた学ランのようなものを着た

「男なら拳で語れ！！！」
喧嘩馬鹿（しかも速攻玉砕）

「騒々しいな……まったく……」
ホスト崩れのようなイケメン。ルーシィによると彼氏にしたい魔導士上位ランカー。周囲には大人のお姉さん。

「混ざってくるねー！！」
結局喧嘩馬鹿（わりと強い）

……なにここ。
ココにはまともな奴がいないのか！！というレベルの異常な面子。
唯一まともな人といえば……

「あらぁ？新入りさんたち？」

このギルドの看板娘にして、総長補佐的な立場にいる女、ミラジェーン

「うっそぉ？本物！？本物のミラジェーン！？」

ルーシィが慌てるほどの有名人のようだ。

「……っじゃない！あれ、止めなくていいんですか？」

しかし結局

「いいのよ、いつもの事だから♪」

「あららら……」

やはり妖精の尻尾のメンバーのようだ。
止めに入らず傍観。
すぐ横ではなぜか激化している身内喧嘩。しかも激化はとまらず…

「あんたら……いい加減にしなさいよ！！！」

「あったまキタ！！」

「ぬおおぉぉぉぉ！！」

「困った奴らだ」

「かかって来い！！」

魔法を使い始める始末。
ちょっとぉ！？コレなんかまずくない？

「ル、ルーシィ！！？」

「魔法！！！？たかが喧嘩に！？」

「ちょっとコレはまずいわね」

喧嘩ごときに魔法を使うなんて……
とはいいつつもソラは魔法をよく知らないのだが、ナツの滅竜魔法、ルーシィの星霊魔法を見ているのでなんとなくではあるが危険性は理解していた。
ギルドメンバーのミラジェーンさえ焦るのだから相当ヤバイようだ。
このままじゃこの建物自体が消失するんじゃない？というレベル。
一緒にいるだけで肌がピリピリしてくる。

しかしその魔法は使われることはなく静かに、収まる。ピリピリしていたものも消え去った。

「やめんかぁ！！馬鹿たれええぇぇ！！！」

「「でか――――――っ！！！」」

ソラとルーシィが声を合わせて驚くほどの巨人。
その姿を見たギルドメンバーは全員停止した。ただ一人、ナツを除いて。

「あら、いたんですか？マスター」

「「マスター！！？」」

ミラジェーンの言葉に再び驚くルーシィとソラ
マスターってことはココのトップ！！？

「お前らびびりやがって！！この勝負、俺の勝ぴ！！」

マスターはソラを（遠慮なく）踏み潰すと、こちらのほうを向いた。

「む、新入りかね？」

「「は、はい……っ……！！！？！？」」

出てきたのは虫の声。。

「ふんぬぅ！！！」

「「……っ……！！！？！？」」

マスターが出す声に言葉を失った二人がびくびくしながら成り行きを見守る。否、見ざる得なくなる。正直言うと体が動かない。姿が変わっていくマスターは……

「よろしくね」

縮みに縮んでソラの腰ほどの高さの爺さんになった。

「「……っ……！！！？！？」」

二人は再び言葉を失った。

「とう！！」

マスターは某ヒーローのように掛け声を放ち、連続後方宙返り。

「んがっ！？」

結局着地失敗。

「「「「……っ…」」」」

誰もが笑いをこらえたのは言うまでもない。
ハッピーは……過呼吸起こしてる！！？やばいよ！！……あ、ミラに助けられた。

「まーたやってくれたのぅ、お前ら。見よ、評議会から送られてきたこの文書の束を」

なんだ！？あの紙束！！評議会？なんだろ？

（なぁ、ルーシィ、評議会って？）

（魔導士ギルドを束ねる機関よ。ギルドがやってることを見張ってるの）

（へぇ…）

うん。よくわかんね。まずギルドって何なんだろう？あとでルーシィに聞いてみよう。

「まずはグレイ」

「あ？」

あ、さっきの変態

「密輸組織を検挙させたまではいいが……その後街を素っ裸でふらつき……」

……なんで脱いだ。

「干してある下着を盗み逃走」

「だって裸はまずいだろ……」

いや、まず脱ぐなよ。

「つぎにエルフマン！！っ貴様は要人護衛の任務中、要人に暴行」

さすが喧嘩馬鹿。保護する意味。それじゃ保護の意味無いじゃん

「カナ・アルベローナ。経費と偽って某酒場で飲むこと１５樽しかも請求先が評議会」

「ばれたか」

おお、さっきの樽女。評議会ってギルドってののトップだよな！？何やってんの！？

「次にロキ……評議員レイジ老子の孫娘に手を出す。某タレント事務所からも損害賠償の請求が来ておる」

あ、さっきのホスト！あんなに女の人いるのにまだいたのか…

「最後にナツ」

あ、ナツだ

「デボン盗賊一家壊滅するも民家7軒も壊滅。チューリィ村の歴史ある時計台倒壊、フリージア教会全焼、ルピナス城一部損害、ナズナ渓谷観測所崩壊により再起不能、ハルジオン港半壊……」

すげぇ、ナツだけ異常だ。ナツ危ない。俺もこれから気をつけよう。そういえば気づいたけど、やっぱりココは俺が知らない世界みたいだな。聞いたこと無い場所ばっかりだ。

「他にもアルザック、レビィ、クロフ、リーダス、ウォーレン、ビスカ……」

さっき喧嘩をしていた面子が全員ビクッとなる。
……ココの人全員問題起してるのか！！？

「貴様らぁ……」

マスターが再び口を開いた。
周囲の気温が一気に下がった感じだ。ゾワリ、背筋が凍る。

「わしは評議員に怒られてばかりじゃぞぉ……」

……すごい威圧感だ。
なるほど、こんなに小さい爺さんがココのトップなわけだ。貫禄っていうのかな？よく分からないけど……うん。みんなの親父って感じ？

「だが……評議員などクソ喰らえじゃ」

え？
マスターは評議員からの始末書を燃やしてしまった

「理を超える力はすべての理のより生まれる。魔法は奇跡の力なんかではない。我々の中の”気”の流れと自然界に流れる”気”の波長があわさり、初めて具現化されるのじゃ。それは精神力と集中力をつかう。いや、己の魂すべてを注ぎ込むことが魔法なのじゃ」

魔法のことが分からないソラだが、この言葉はじっくり聞いていた。理解できたわけじゃない。ただ、感じた。魔法が何なのか、体で感じている。

「上から覗いてる目ン玉気にしてたら魔道は進めん。評議員の馬鹿どもを恐れるな！！！」

「自分の信じた道を進めぃ！！それが妖精の尻尾の魔導士じゃぁ！！！！」

ウウォオオオオーーー！！！

建物内に歓声が響く。もちろんソラの声も混じっている。ルーシィの声も。

本当にさっき喧嘩をしていたのか！！

そう思えるほどの仲のよさ。

笑い声は夜遅くまで続いたという。

◇◇◇◇◇◇◇

「え？じゃぁソラって違う世界から来たってこと！？」

「まぁ、そういうことになるのかな？」

「すごい、物語みたいね……だけど大変じゃない？この世界のことはよく分からないんでしょ？」

「おう！でも、なんとかやっていけそうな気がするよ！！」

夜

ソラはルーシィとミラ、あとその他モブの皆さんに自分のいきさつを話していた。

ルーシィとも前に話したが、この世界に自分がいた島『ディスティニーアイランド』はないようだ。つまり本格的に分からない場所に着いたということだ。

「でも衣食住はどうするのよ？このままじゃ泊まる場所も無いわよ？」

「俺、野宿はなれてるから平気！！」

「野宿って……あ、ナツのとこに泊めてもらえば？」

「え？いや、ソレは悪いって」

と、ここでナツがやってきた。

「俺の家？別に来てもいいぞ？俺とハッピーしかいねぇからな！な、ハッピー！！」

「あい！」

簡単に承諾したナツと、元気よく返事をするハッピー

「ほんとか！！？」

「おう！」

「あい！！」

「やったねソラ！」

「ルーシィのおかげだって！よろしくな！ナツ！」

と、言うことでしばらくの間ナツの家でお世話になることに。当面の間はお世話になりそうだなぁ……。

「そうだ！ソラもギルド入っちまえよ！！」

「え！？いや、でも！俺いつかいなくなるかもしれないし！！」

「ならソレまでの間だ！！お前の魔法すげぇらしいしな！一回勝負して見たいし。それにギルドは家族だからな、寂しい思いしなくてすむぞぉ～！！」

家族、ねぇ。思えば母さんにも会えないんだよな…。それに俺の魔法……あれって魔法なのかな？そのことも気になるし。入ってみるのもいいかもしれない。あ、あと勝負は遠慮願いたいなぁ……

ソラはしばらくうつむき、考える。そして

「……そうだな、せっかく違う世界に来たんだし、楽しむのも悪くないよな！」

「あい！！」

「よし！おれも妖精の尻尾に入るぞ！！」

「よっしゃぁ！！」

そうしてこの日、ソラは妖精の尻尾の一員になった。

◇◇◇◇◇◇◇

翌日
ソラがナツの寝相の悪さに部屋を出て行ったのは言うまでもない。
その事を泣く泣く話すソラの顔は、真っ赤に膨れていたという。（ルーシィ談）

第三話ギルド（後書き）

次回！！

マカオ救出からのあいつ出現。あの変態！！

第四話魔法（前書き）

すみません。マカオ救出まだでした。ってか思った以上に魔法の説明が長かったです。

あと自己解釈大きく持ってます！まぁ、ご了承ください！では、どうぞ！

第四話魔法

◇◇◇◇◇◇◇

それは妖精の尻尾の朝

「なぁ、結局のところ、魔導士ってなんなんだ？」

「あぁ、そっか、ソラは魔導士も分からないんだっけ」

ソラも、今日から魔導士だ。

「えーっと、まず私たちのことから説明するわね。私達のように魔法を使える人、または魔法を使ってソレを仕事としてる人のことを『魔導士』っていうの」

「ふむふむ」

「魔導士たちが使う魔法は人それぞれ。たとえばルーシィの魔法は星霊魔法だから店で買えたりもするわね。あとハッピーみたいな魔法は能力系（アビリティ）。先天性の魔法よ。たまに後天的な人もいるけど」

「……なるほど」

ミラの分かりやすい説明。もっとも、ソラにはほとんど理解できていない。

じゃぁ、俺の魔法は何なんだろう？

「あ、だったら俺の魔法は何なんだ？店で売ってそうでもないし、別に昔から持ってるわけでもないぞ？」

「そうね。ソラの場合、珍しい古代の魔法（エンシェント・スペル）っていう魔法ね」

「古代（エンシェント・スペル）の魔法ゥ？」

「そう。ソラの『キーブレード』はナツとかと一緒。ナツも『滅竜魔法』っていう古代（エンシェント・スペル）の魔法を使うの。でもこの魔法は本当に珍しいからどんな能力か、どんな力かは誰もわからない。ナツみたいに教えてもらったりしてれば分かるだろうけど、ソラみたいに急に使えるようになった人は自分で開発していくしかないわね」

「そっか……」

うーん…自分の力ぐらいは把握しておかないといけないなぁ……。制御できないは危ないしな。

「じゃ、今度はギルドについて説明していくわね。リーダス、光ペン貸して」

「うぃ」

ミラが次々と”空”に文字を書いていく。

すごい。あれも魔法なのかな？えっと…政府、魔法評議院、地方ギルド、ギルド……力関係かな？

「まず、魔法界で一番えらいのが、政府と繋がりがある評議会……魔法評議院ね。魔法評議員は１０人魔いて、法界におけるすべての秩序を守るために存在するの。犯罪を起こした魔導士こ裁くのもこ

の機関ね」

あ、昨日ルーシィが言っていたことだ。
巨人の鼻にいたボラもここに裁かれたのだろう。

「その下にいるのがギルドマスター。うちのマスターとかよ。マスターは評議会での決定事項を通達したり、各地方ギルド同士の意志を伝え合ったりして、私達を円滑にまとめてくれたり……まぁ、大変なお仕事よね」

へぇ……マスターもがんばってるんだな。
と、ここで気づく。コレってマスターの説明……

「結局ギルドってなんなの？」

「うん。ギルドって言うのがその魔導士達が所属する場所。魔導士たちはそこで仕事をもらうのよ。簡単に言えば仕事の仲介所ね」

「ギルドでしか仕事はもらえないのか？」

「もちろん、フリーで働いている人もいるけど、その人はよっぽど情報力に長けていて、実力がある自信家ね。ギルドのいい点は情報が集まることと、信用されやすいから報酬がいいこと。あとは簡単にパーティを組めるから難しい依頼もこなせることかしら」

「……なるほど」

そっか。ギルドにいれば仲間と一緒に行けるんだな。しばらくは一人じゃ無理だし、誰かと一緒に行くのもいいかも。
頭の中でこれからの算段を建てていくソラ

「！！って、俺まだ仲間いないじゃん！」

がっくし、とうな垂れるソラ。まだ入ったばかり＋この世界のことよく分からないというハンデで誰が一緒に仕事へ行ってくれるか……。

しかしそこに救いの声

「あ、ならあたしと組もう？ソラ。あたしもまだ入ったばかりだし、それに一人じゃ心細いから」

「ほんとかルーシィ！！」

やった！と喜ぶソラ。これでどんな仕事もいける（気がする）な！！
そんなソラの横ではミラがまた何かを書いていた。

「ミラは何かいてるの？」

「みてわからない？」

えぇーっと、丸い物体に生える何か……
これは…！！

「……ジャガイモ？」

ああ！ミラが泣いちゃった！！！

「ソラぁ……女の子を泣かせるなんてぇ」

ルーシィのニヤニヤした悪そうな顔。腹立つなぁ……

「じゃぁルーシィはコレ何か分かるのか！？」

「え？……えぇっと……山芋？」

「そんな変わらないじゃん！！」

後でミラに聞いたところ、ギルドメンバーの似顔絵だったようだ。
少々居心地が悪くなったソラは、視線を明後日の方向に向けた。そ

こにはテーブルでギルドメンバー達と話しているナツの姿が。

「なぁナツ、お前あんなかわいい子どこで見つけて来たんだよぉ」

「俺のチーム入ってくんねぇかなぁ……」

下心たっぷりの男達。こんなりでも実力があるから憎めなかったりする。

一方ナツは

「どこ行くんだナツ？」

「仕事だよ。金ねーし」

まじめに働こうとしていた。

「報酬がいい奴にしようね」

「おう！……コレなんかどうだ？」

ナツが手に取ったのは盗賊退治の依頼書。報酬は１６万Ｊと悪くない仕事だ。

そんなナツの程近いところでは、マスターと子供が何かを言い合っていた。このギルドのメンバーの息子、ロメオだ。

離れたところで聞いていたのだがは話の内容はよく聞こえた。

どうやらロメオの親父、マカオが任務に行ったきり帰ってこないそうだ。それも3日。心配になったロメオだったのだが、マスターはそれを追い返してしまった。

「マスター、厳しいんだな」

「マスターも心配なのよ」

ふぅん……と一息つくソラ。するとナツのいるほうから

ズドン！！

重い音が響いた。

その原因、ナツは荷物を持ってさっさとどこかへ行ってしまった。

その後姿は、何か急いでおり、イラついているようでもあった。

「どうしちゃったの？アイツ？」

「な。ナツ、大丈夫かなぁ……」

心配するソラとルーシィ。
そんなナツのことをミラが話し出す。

「ナツもね、ロメオ君と一緒だから。自分とダブっちゃったのかな」

「え？」

「ナツのお父さんもね、出て行ったきり帰ってこないのよ。お父さんって行っても育ての親だけどね……しかも、ドラゴン」

「「ドラゴン！！？」

「小さいころドラゴンに森で拾われて、言葉や、文化や、魔法なんかも教えてもらったんだって。でも、ある日そのドラゴンは姿を消した」

「そっか……」

ソラとルーシィの顔が若干暗くなった。
ミラは再び言葉を紡いで行く

「私達、妖精の尻尾のメンバーはみんな何かを抱えているの。傷や、痛みや、苦しみや……私も」

「え？」

最後の声は聞こえなかったが、顔は切ないものだった。

「ううん、なんでもない」

再び笑顔に戻るミラ。
しかし、どこか無理をしているようなところもあった。

その言葉を聞き、ソラとルーシィは顔を合わせ、ひとつ、決心をした。

◇◇◇◇◇◇◇

「でね？でね？あたし今度ミラさんのところに遊びに行くことになったの～♪」

「下着とか盗んじゃだめだよ」

ここはナツたちが乗る馬車の中。

「ってかなんでルーシィたちがいるの？」

「何よ？何か文句ある？」

「そりゃぁもう、いろいろと……あい」

本来ナツとハッピーだけだったのだが、ソラたちもそれに乗ってついていくことにしたのだ。

「だってせっかくだから妖精の尻尾の役に立つことをしたいなぁーと♪」

その顔は明らかに何かたくらんだような顔。
その顔を見て全員思ったことだろう。

（（絶対株上げる気だ！！））

一方ソラは若干ルーシィに引きながら

「あ、俺はまだ仕事とかいったことないから着いていこうって思っただけ」

とだけ言って置いた。

正直にナツのことが心配でって言えばいいのに、って思ったのは秘密だ。

「それにしても本当にあんたって乗り物だめね。いろいろかわいそう」

「あ？」

ナツはというとさっきから酔いでダウン状態。こんな様子で大丈夫なのか、と思うほどだ。

「そういえば、マカオさん探すの終わったら私すむところ探さないとなぁ」

「オイラとナツんのところに住んでもいいよ」

「本気で言ってたらヒゲ引っこ抜くわよ猫ちゃん。ソラがあんな顔で帰って来たんだからいやよ」

あはは、そう談笑しているうちに馬車は止まった。

「止まった！！」

止まった瞬間に復活するナツ

「着いたのかしら？」

そういいながらドアを開けたルーシィ。

「すんませんお客さん。コレ以上は……無理です」

その視界の先で広がるのは

吹雪

「ナニこれ！山のほうとはいえ夏季なんじゃないの！？」

馬車か降りる面々

「「寒っ！！」」

思わず叫ぶソラとルーシィ

「当たり前だろ？そんな薄着じゃ」

「あんたも一緒じゃない！！」

こんな場所が初仕事かぁ……これ無理な気がしてきた……

ソラがそう思ったのは当然のことかもしれない。

「……うう、寒い」

ルーシィはそういいながらナツの布団を体に巻きつけ

「ひひひ開け、時計座の扉ホロロギウム！」

と叫ぶ。そこにいたのは

大きな時計

「おお！！時計だ！！」

そしてルーシィはその時計に入ると

「「あたしここにいる」と申しております」

幸せそうな顔で中に座り込んだ。

「あ！ずるいぞ！！自分だけ！」

「何しにきたんだよ」

ナツのナイス突っ込み。
そういえば、とソラが一つナツに聞いた

「何しにきたといえばマカオさんはここに何しにきたんだ？」

「しらねぇでついて来たのか？凶悪モンスターバルカンの討伐だ」

バルカン？と首をかしげるソラ。一方ルーシィは驚いたような、なんともいえない顔（ホロロギウムの中）で

「「あたし帰りたい」と申しております」

「はいどうぞ、と申しております」

ソラがルーシィと組むのやめようかな、と思った瞬間だった。
まだ、コンビ結成３時間だった。

◇◇◇◇◇◇◇

「マカオー！！どこだー！！バルカンにやられちまったかぁ！！」

「マカオさーん！！」

山を探索し始めて１５分ほど。バルカンは見る影もなく、マカオの姿も見つからない。
すると山の上部のほ方から雪塊の崩れる音が！

「危ない！！」

全員が四方によける。
その中心にいたのは白い毛皮のサルのような生物、バルカンが

「バルカンだー！！」

ナツはバルカンの目の前で対峙するように立ったが

「うほっ！！」

バルカンはソレを無視。ナツを飛び越え

「人間の女だ♪」

ホロロギウムに入るルーシィの元へ。そして

「うほほ～」

ホロロギウムごと担いでどこかへ走っていく。
って！まずくないか！？コレ！！

「ナツ！！」

「分かってる。あいつ、しゃべれんのか。行くぞソラ！ハッピー」

「あいさ！」

「お、おう！！」

すぐにバルカンのあとを追った。
その先で

「「てか助けなさいよ～！！！」と、申しております」と聞こえた気がする。

第四話魔法（後書き）

次こそマカオの救出を！！
次は初銭戦闘に入りますね…大丈夫かなぁ…

あ、あとやっぱり最初に登場するやつらは黒いアレですよね！（笑）
次回をお楽しみに！！
感想待ってます（笑）

第5話力と仲間（前書き）

うん。ＫＨサイドの敵は次の仕事かなぁ…エルバー…ハートレス使えるのかなぁ？ｗｗ

第5話力と仲間

◇◇◇◇◇◇◇

あたしの名前はルーシィ！17歳の星霊魔導士よ。
あるま街でソラって言う少年とナツと猫（？）に会って憧れの魔導士ギルド、妖精に入ることができたの。
ギルドに入ってすぐ、妖精の尻尾の魔導士の一人が仕事から戻らないって聞いたナツが吹雪の山、ハコベに助けに行ったのね。私は興味本位……うん。別に心配なわけじゃない。興味本位でナツについて行ったんだけど……

「「なんでこんなことになってるのー！！」と、申されましても！！」

なぜかサル達に囲まれてます。

第五話仲間と力

「ルーシィ、どこ連れて行かれたんだ？」

「さぁなぁ……この吹雪じゃ、視界も悪いし……ん？この匂い！！急に出てきた！！」

「分かったのか！？」

「おう！行くぞ！！」

「おう！「あい！」」

ルーシィが連れ去られてから大体3分ぐらい。ただでさえ視界が悪い吹雪の中白いサルを見つけるのは至難の業だった。なんとかナツが見つけたみたいでそこに向かってます。

「なぁ？バルカンってどんなモンスターなんだ？だだのサル？」

ナツ達はともかくソラは何も知らない。この状況で戦ったりするのは困難を極めるだろう。

そんな質問に答えてくれたのはハッピーだった。

「バルカンはね……」

「バルカンは？」

「最近では珍しい白いサルです！！」

「つまり何も分からないわけだな」

こんなんで大丈夫なのかなぁ……お！ナツがとまってる。着いたのかな？
ナツは山の中腹にできた少々大きい洞穴の前で止まっていた。ナツの元へ向かい中を覗き込むと……

「ウホ！ウホ！ウホ！ウホ！」

ルーシィの周りを回るサル達。

「助けてぇ……」

涙目のルーシィ。

「ったく！やっと追いついたぞ！！マカオは……」

ルーシィの元へ、性格にはバルカンの元へ走っていくナツ

「どこだぁあああ！うべ！！」

しかし出落ちというかなんと言うか。足元にあった氷に気づかず転んでしまった。
しかし流石はナツ。この程度じゃなんともない。普通の人間なら既にグロッキーだろう。岩破壊してるし。

「おい！猿！マカオはどこだ！！言葉分かるんだろ！！人間の男だ！！」

「ウホ？男？」

「そーだ！！」

どうやらバルカンは人間の言葉を十分に理解できるようだ。

「マカオをどこに隠した！！」

指を刺し、言い放つナツ

「うわ！隠したって決めつけた！！」

その言葉に突っ込むルーシィ。

「ウホホ？」

しかしつっこんだ後にルーシィは気づく。

”マカオは生きているのか？”

もう3日も帰って来ていないのだ。可能性としてはありえる。なんとしても避けたい状況ではあるが、怪我して動けない、というのは間違いないだろう。

しかし、バルカンはナツを指で呼び寄せると、

「こっちか？」

ドガッ！！

ナツを山から蹴り落としたのだった。

「おで、男嫌い。女好き」

「「ナツ！！！」」

ソラとルーシィの声が響き渡る。

「だ、大丈夫だよな？」

「た、たぶん……ったく！ナツが無事じゃなかったらどうしてくれるのよ！！行くわよ、ソラ！」

「おう！」

ナツの仇？をとるため二人はバルカンに襲い掛かる。
ルーシィは自分の鍵に手を伸ばし、叫ぶ。

「開け！金牛宮の扉！！タウロス！！」

「ＭＯォーーー」

「「牛！！？」」

今度はバルカンとソラの声が合わさる。
二人？は顔を見合わせると

「うぉ！！」

「ウホ！？」

同時に攻撃を再開した。
一方ルーシィのほうでは……

「Ｍｏぉ…ルーシィさん今日も相変わらずいい乳してますなぁ！！」

「あぁ、そういえばこいつもエロだった」

あぁ、なんでこう、まじめな奴がいないのかしら？と自分の魔法に疑問を持っている。

ソレを見ていたバルカンは、牛とルーシィに嫉妬…？したのか

「おでの女取るな」

いきなり爆弾発言

ソレに対しタウロスも、

「俺の女？俺の乳と言ってもらおう！！」

「言ってほしくないわよ！！」

爆弾発言

ソレを聞いて真に受けたソラ。

「え！？ルーシィって牛の……！？」

「ちょっと！あんたまで勘違いしないで！！」

「なんだつまらない」

「つまらないってなによ！！！」

なんとも緊張感のない空気になってしまった。
そんなところに来たのは

「よーくも落としてくれたなぁ」

「「ナツ！！」」

落とされたしまったナツ。ナツは再度洞穴に入り、

「一匹増えてんじゃねーか！！！」

タウロス《・・・・》を殴り飛ばした。

「Ｍｏぅ、だめっぽいですな……」

タウロス一発ＫＯ。

「ちょっとぉ！！こいつは味方よぉ！！」

ルーシィの叫びもむなしく、あっさりタウロスは倒れた。
あぁ、もうあたし戦力外じゃない……嘆くルーシィ。基本的に星霊魔導士は1体しか星霊を呼ぶことはできない。さらに呼んだり戻したりするには星霊と魔導士の相互承諾が必要だ。なのでタウロスがこっちに召還されている状態ではルーシィは他の星霊を呼ぶことができないのだ。

「ってか、ナツはどうやって助かったんだ？」
「ん？ハッピーのおかげさ。ありがとな」
「あい！」
ハッピーには翼（エーラ）という魔法があるので飛ぶことができる。しかし重量には限界があるので1回に1人が限界だ。ソラとルーシィは身をもって知っている。
そんな状況を見て、いつの間にか復活していたルーシィは
「あんたって乗り物ダメなのにハッピーは平気なのね」
と。
そしてそれを聞いた全員に
「おまえ、何言ってんだよ……ハッピーは仲間だろ」
「ルーシィ、今のはひどいぞ！」
「おいら、もう立ち直れない！！」
全力で引かれていた。

「ウホ！！！」

完全に無視されて怒ったのか、バルカンは全力でこちらに走ってきた。

「なぁ。ルーシィ、いいか？妖精の尻尾のメンバーは全員仲間だ」

ナツはそれに気づいているのか、気づいていないのか、話を続ける。

「じっちゃんも、ミラも」

「ナツ！後ろ！！」

さすがに危ないと判断したのか、ルーシィが叫ぶ。

「うぜぇ奴らだがグレイやエルフマンも」

「わかった！わかったから後ろ向いて！！」

もう、バルカンとの距離は攻撃圏内だ。

このままでは危ない！！

そう思って飛び出そうとしたソラだったが、ナツの顔を見て、やめた。

その顔は何か満ち溢れていて、安心できる顔だ。

「ハッピーもルーシィも、ソラも、みんな仲間だ」

「だから！俺はマカオをつれてかえるんだ！！！」

完全に死角から襲い掛かってきていたバルカンを吹き飛ばし、

「早くマカオの場所いわねぇと黒焦げになるぞ？」

挑発した。

その言葉を聞いて、ルーシィは実感した。

ナツは本当に、誰よりも妖精の尻尾（このギルド）を大事にしているんだと。

◇◇◇◇◇◇◇

ナツとバルカンの戦いをソラは部屋の端っこで見ていた。

素直な感想は

すごいな

だった。

ソラはまだ誰かのために、あそこまで戦ったことはない。

だからナツの戦い方には

「憧れるなぁ……」

◇◇◇◇◇◇◇

「いっくぞー……」

バルカンの怒涛の攻撃を意図も簡単に防ぎ、よけて、カウンターを入れて、ナツは最後の締めにかかろうとしていた。

「火竜の鉄拳！！」

火を纏った拳をバルカンに打ちつけ、バルカンをＫＯさせてしまった。

「ねぇ、マカオさんの場所聞くんじゃなかったの？」

「おわ！そうだった！」

「完全に気絶しちゃってるな」

バルカンは完全に気を失っている。マカオへの情報源は完全に消え

てしまった。バルカンが目を覚ますまで待たなくてはならない。それがいつになるか……

そう、思った瞬間

ミミミミミミ……

バルカンの体が光り始めた。

「な、何だぁ！？」

全員がバルカンのほうを向く。とそこには

「猿がマカオになった！！！」

「「えぇ！！？」」

なんとバルカンがマカオの姿に変形したのだ。

「接収（テイクオーバー）だ！！」

「接収（テイクオーバー）？」

「体をのっとる魔法だよ！！」

そんなものもあるのか！そう、思った矢先、

グラっと、マカオの体が揺れ、

「わああぁぁ！！」

洞穴の外へと落ちようとしていた。
ナツがマカオの足をつかみ、ハッピーがそのナツを支える。

「二人は無理だよー！！」

しかしハッピーに二人も持ち上げる力はない

「あきらめんな！！」

そこに食いついたのはソラとルーシィ。
しかし、女一人と１４歳の子供。大人の体重二人分を持ち上げることなどできない

「もう……無理…！！」

全員の体が落ちる！そう思った瞬間

「Ｍｏォ大丈夫ですぞ」

復活したタウロスによって救出された。

◇◇◇◇◇◇◇

「出欠がひどい！！応急セットじゃ間に合わない！！」

「接収（テイクオーバー）される前に相当争ったみたいだね」

「わき腹の傷が……」

「マカオ！しっかりしろよ！！」

全員によって引き上げられたマカオの傷は相当のものだった。体中は傷だらけ、寒い中にいたせいで体も冷えている。これでは本格的に危ない。

「くっそ……どうする！！」

悩む全員。

そしてナツが無言で

火のついた手をわき腹に押し付けた

「グワァァァァ！！」

あまりの痛さにうめくマカオ

「ちょっと何やって……」

ルーシィはそこまで言って気づく。この方法なら止血になる、と。

「死ぬんじゃねぇ！！ロメオがまってるんだろ！！」

ナツの言葉か、それとも痛さによって目を覚ましたのか。マカオがゆっくり話し出した。

「くそ、情けねえな……19匹は、倒し…たんだ。最後の1匹に接(テイク)収(オーバー)されて……」

「馬鹿やろう！しゃべるんじゃねぇ！！傷口が開くだろ！！」

19匹！！？

ソラとルーシィはその言葉を聞いて、絶句する。

魔導士の仕事をなめていた、と。
楽しくやれるものだと思っていた。しかしそんなことは間違いだった。もちろん楽しくできるだろうが、それ以前に『命』がかかっている。命がなくなればその楽しさも味わえないのだ。
二人は今日のことを決して忘れないと決意した。

◇◇◇◇◇◇◇

町に戻ると、街の入り口には少年、ロメオの姿が。

「父ちゃん、ごめん」

そもそもこうなったのはロメオの責任でもあった。
マカオが一人で無茶な仕事へ出たのは、街の子供達に妖精の尻尾のことを馬鹿にされたロメオが腹を立てて
「父ちゃんすっごい仕事いってきてよ！おれ、このままじゃ悔しいよ！！」
といったのが原因だったのだ。

「心配かけたな…」

しかしそんなロメオを咎めもせず、マカオはロメオに抱きついた
そしてニカッと笑うと

「今度、クソガキ共に言われたらいってやれ。お前の父ちゃんは怪物１９匹倒せるのかってなよ！！」

そういったのだ。

無言で立ち去ろうとするナツたちにロメオは

「ありがとー！！ナツ兄！！ハッピー！！」

「それと、ルーシィ姉とソラ兄も！！！」

そう叫んだのだった。

◇◇◇◇◇◇◇

「そういえば、ナツはあの吹雪の中どうやってルーシィの場所分かったんだ？」

「ん？においがしたんだよ」

「どんな？」

「ルーシィの脇の匂い」

「……。」

その後ナツはルーシィとお話したそうだ。

第5話力と仲間（後書き）

オチすみません。
今回はソラの気持ちに重点を置いてみました（笑）

まぁ、こんな感じになっちまいますね。結局ソラの戦闘なかったw
本当はここでハートレス出そうと思ったけど……
出る要素なくね！！？と気づいてしまいww

でわでわ、次回もお楽しみに！！
感想など待ってます！！

第6話これって魔法なのかな？結局はただの斬撃だよね。（前書き）

昨日はすみません・・・・・書き終わりませんでした・
とはいってもこれを待っていてくれている人はいるのか謎ですけどね～ｗｗ

さてさて、今回、ソラが開花します。
使用魔法とかは後で記述です～

では、どうぞ。今回はほぼオリジナルなんで、できは…うん。

第6話これって魔法なのかな？結局はただの斬撃だよね。

◇◇◇◇◇◇◇

「じゃぁ、私はこれでいくわね？怪我無い様に気をつけてね」

「おう！ありがと、ミラ！！」

今日はちょっとキーブレードの扱いに慣れるために訓練だ。

6話これって魔法なのかな？結局はただの斬撃だよね。

「よし！じゃぁやっていくか！！」

妖精の尻尾の裏、ちょっとしたスペースがあるこの場所はギルドメンバー達の訓練場になっていたりする。魔法の試し打ちなどができるスペースで、結構広い。

ソラはそこでキーブレードの力を見ていこうと、訓練に出ていた。

今日の朝にルーシィから仕事に行かないか、といわれたのだが、自分でも把握していない力を他人に使うのが怖かった、というのもあ

って丁重に断った。ルーシィによると『変態オヤジ退治』だそうだ。正直戦えても断っていたかもしれない。

そんなことはさておき、今、ソラの目の前には3体のダミー魔水晶（ラクリマ）。つまり仮想の敵が。魔水晶というのは魔力を持っていない人でも使えるように作られた汎用魔法。簡単に言えば、魔力なしで使える魔法だ。今回使うのはダミー魔水晶。これはあたりを自由に動き、時折ビームのような攻撃をしてくるもので、訓練用に使われる。レベル設定によってはスピードも変えることができる。

ソラはそのレベル設定を真ん中程度、あたりをゆっくり動く程度に設定し、起動させた。

そして、

「うっしゃ！訓練開始！！」

訓練を開始した。

とはいってもソラは戦闘に関して初心者。島でチャンバラをしていた程度。もちろんキーブレード、つまり剣の扱いも我流だ。なので隙も大きくなる。

「うわ！」

「どうするかな……」

ダミーといえど、訓練用に作られたものなので、隙を的確に突いてくる。つまり1体に集中しすぎると周りの敵にやられてしまうということだ。
だからソラは3体いるダミーの位置をしっかり把握しつつ、攻撃をしていかなければならない。

「これ、結構難しいな……」

しかし、諦めるわけにも行かない

「うん！がんばろう！」

ダミーにキーブレードを叩きつけていった。

ーーーーーー

妖精の尻尾ギルド内

「あいつ、がんばるな」

「漢なら強くあるべき！！いいことだな」

グレイとエルフマンは訓練をするソラの様子を見ていた。
しかし見ていて思う

「やっぱ、動きが初心者だなありゃ。硬いね」

「筋はいいと思うがな」

「でもよ……ほれ、またよけられた」

二人から見て、ソラの動きは”硬い”
周りを見ようと必死なのは分かるが相手との距離感がつかめていない。もし、相手が猛獣相手だったら自分から死ににいってるようなもの、ということだ。

「筋はいいがありゃぁ危ねぇ……うし！俺が少し稽古をつけてやるか！」

「お前が？」

「いいじゃねぇかよ」

「別に悪いとは言ってねーよ……すぐに行くのか？」

「いや、もう少し様子を見とく」

「そうか」

二人は再び視線をソラに戻した。

◇◇◇◇◇◇◇

「ほっ！！よ！！」

ソラは器用にボールを叩いて打ち上げていく。

「３６、３７、……」

次々と回数を重ねていき、

「５０！！」

ラストにボールを大きく吹き飛ばした。

「おっしゃぁ！記録更新……って！休憩のはずだったのに！！」

休憩時間とはなぜか集中できるもので、いつもできないようなことも簡単にできてしまう。それにしてそこまで実力がついていなかったりする。

「はぁ……逆に疲れた……再開しよ……」

自分の愚かさを嘆きつつ訓練再開。しかし

はぁ、はぁ、くっそー……全然あたらない！！なにがいけないんだかなぁ…

3体倒すのに何分もかかってしまい、必要以上に走る訓練となってしまった。

何がいけなかったか、自分なりに考えてみる。

まず、間合いが取れていない。

それに一撃の威力が低いために1体のダミーを倒すのに時間がかかってしまう。

しかしなぜ、そうなってしまうかが分からない。

「やっぱり、誰かに見てもらったほうがいいかなぁ……」

ギルドのメンバーを考えれば剣を使う人多いだろうし、そういう人に聞いてみるのもいいかもしれない。

しかしそう思った矢先

「お前はもうちょっと周りを見て距離感を気をつけたほうがいいな」

ギルドメンバーの一人、グレイに声をかけられた。

「あ、えーっと……グレイ！！どうしたんだ？」

「お前がいっしょーけんめいやってるのを見たんでな。ちょっと稽古つけてやろうと思ったんだよ」

「ほんとか！？助かった！自分じゃ何が悪いか分からないんだよな」

教官がいるのと、いないのでは結果が大きく異なる。何より客観的に見てくれるので悪いところが浮き彫りになりやすいからだ

「あとうもう一つ。力入れすぎだ。もうちょっと抜いて振りぬくようにやってみ？」

「お、おう」

グレイに指摘をされていく。

「ま、見ててやるから試してみろよ。最初に今までやってた斬り方。次にちょっと力を抜いたやり方な。相手は…これでいいだろ」

そういってグレイは自らの魔法で氷でできた紡錘形の物体をいくつか作った。

「すっげぇ！！いまのグレイの魔法か！？」

「ん？あぁ、氷の造形魔法（アイス・メイク）ってんだ。ま、これは後で見せてやるから、今は集中しな」

「了解！」

剣を構え、まず一撃目

いままでのやり方。すなわち力任せに斬る方法。
やはりあまり威力は高くないようで、氷の半分のところで止まってしまった。

一度剣を抜き

再び剣を構える。

グレイに言われたとおりに力を抜いて、振りぬくことに意識を置く。
すると氷にキーブレードが当たった後、スッ、と振りぬくことができた。さっきとは全然違い、氷は真っ二つになった。

「うわ！すごい！自分の力じゃないみたいだ！」

「だろ？まぁ、俺はこういうの専門じゃねぇから、もっと深い部分

とかはいえねぇんだけどな。詳しくは……エルザに聞くといい」

「エルザ？」

「ん？そうか、お前まだ会ったことなかったな。エルザはこのギルド１の女魔導士だ。お前と同じように剣を使う。まぁ、槍とかも使ってるけどな」

「へぇ……」

「よし、この話はまただ。今度は空間把握の練習するぞ」

そういってグレイは魔法を使い、氷の銃を作り出す
そして

「いいか？今から打つこの球を全部はじき返せ。そうだな……１００個ぐらいか？１回でもミスったら最初からな」

訓練を始めたが

「一球目からミスんなよ……」

終わるのは相当先のようだ

◇◇◇◇◇◇◇◇

「９５！……９６！！……」

グレイが打つ玉をどんどんと打ち返していくソラ。この訓練を始めて２．３時間は経っている。何度も失敗して、何度もやり直した。しかしやっとここまできた。

「９８……９９！！！」

「よっしゃぁ！ラストだ！決めろよ！！」

「これで終わりだ！！……１００！！！」

１００個目を打った途端

「「うへぇ……」」

二人してへたり込んだ

「おまえあんなにボール打つの得意なくせに……まぁ、これで間合

いのとり方は分かったんじゃねぇの？」

「見てたのかよ！！……まぁ、これだけやれば自分の間合いは分かった」

初めのほうは自分が攻撃できる射程がわかっていなかったため、まったく打ち返せなかったが、数繰り返していくうちに自分の間合いを習得することができた。

「うし、じゃぁ最後な。さっきみたいにダミー倒してみ？」

「えー！！まだ動くのかよ！！」

「うるせぇな！お前のためだろ！！それにさっきよりだいぶ早く倒せると思うぞ？」

「……はぁ」

ため息をつきつつダミーを起動させる。
ダミーが動き始め、こちらへ攻撃しようとしてきたところでソラも攻撃を始める。

ダミーの懐へ入り、まず1撃。それは最初のときのように力任せではなく、スッっと通り抜けるような感じでダミーを一閃した。
そして後ろから近づいていたダミーに振り向きざまに一撃。
その後、近づいて来てしまったダミーにコンボを決め、最後の一撃で、墜とす。

「うわぁぁ……すげえ…」

自分の体のはずなのに、その感覚がない。ソラの最初のようなフットワークではなく、自然な、流れる動きでダミーを倒すことができた。

そんな様子を見て、グレイはニヤッと笑った。

「全部お前の力だ。初めはどうなるかと思ったが、お前は筋がいい。強くなれるさ」

「そうかな！？よっしゃぁ！！」

ソラの喜びはしばらく続いていた。

◇◇◇◇◇◇◇

訓練が終わった後、ソラとグレイは体をクールダウンがてら、いろいろな話をしていた。もっとも内容はソラのことばかりだったが。

「なら、お前は島に帰るためにギルドに入ったのか」

「おう。まぁ、それがいつになるか分からないけどな。それにリクとカイリも探さなきゃだし……」

「ふぅん……お前も苦労してんのな。大体リクとカイリは本当にここにいんのかよ？」

「あ」

「おいおい今気づいたって顔すんなよ！？」

「あっはは！」

「笑い事じゃねぇし！！」

話に花を咲かせていると、もうすっかり夕方に。結局丸1日ソラの訓練は続いた。
グレイが言うにあとは経験、だそうで、あとは仕事をこなして行くしかないようだ。まぁ、これからの成長が楽しみだ、といったところがグレイの考察。

「はぁ……いい加減中に入るか……」

「そだね」

二人してギルド内部に入ろうと、ギルドの正面に回りこもうとする。
しかし、裏から出よう、といったところで

「「！！！？」」

グレイとソラは二人して振り返った。

「今、なんかいたよな？」

「あぁ、俺も感じたこともねぇ。気をつけな」

二人はゆっくりとギルドの裏に戻る。すると

ピシン！という音がしてギルドの正面へと続く道に透明の結界が張られた。

「おいおいおい！なんだこいつらはァ！」

「俺に聞くなって！！」

できた結界はキーブレードで叩いても、グレイの魔法でも突き通ることがなく、すべてはじき返してしまった。
そしてギルド裏のスペースには大量の黒い闇

「あ、こいつら！！島に出た奴！！」

「知ってるのか！？」

「ああ！地面に潜ったりして厄介なんだ。でもまぁ、大して強くはないかな」

地面から現れたのは最下級ハートレス、シャドウだ。シャドウは地面に溶けつつ移動する。大して強くはないが、相手にするのは少々骨が折れる。

とは言ってもそれは以前のソラの話。シャドウ1体倒すのにも何回も攻撃しなければならなかったが

「はぁ！！」

今は一撃だ。

相手の間を縫いつつ連続で何体も倒していく。

「は！やるじゃねぇか！俺も負けちゃいられねぇな」

そんなソラを見てグレイも奮起したのか

「アイスメイク、槍騎兵（ランス）！！」

氷で作った槍を飛ばし、連続で何体も倒していく。一発一発の槍が貫通するためにグレイの目の前には黒から切り離したような筋ができた。
それを見たソラは

「すっげぇ……」

「感心してる暇があったら倒せよ……」

まだまだハートレスは残っている。

「でもキリないなぁ……」

「だな……仕方ねぇ！出し惜しみしないで一気に決める！」

そしてソラとグレイは一度だけ背中合わせになり

一斉にシャドウに飛び掛った。

◇◇◇◇◇◇◇

ソラはシャドウの間を縫い、通り抜け様に斬りつけていく。そして遠くにいるシャドウへ一気に近づき、突進攻撃。これだけで数匹のシャドウが闇に溶けた。しかし、一撃決めたら一瞬の隙は生まれて

しまう。間を縫うように行った走った先はハートレスたちの中心。
ソラはシャドウに囲まれてしまった。
しかし、自身の魔力をキーブレードに乗せ、キーブレードを構えて大きく一回転

「これでも食らえ！俺の必殺技1！！ラウンドブレイク！！」

魔力を纏ったキーブレードは斬撃自体を巨大化し、周囲のシャドウへ飛んでいく。大きくシャドウたちを吹き飛ばすとともに、消滅させた。

「おっしゃぁ！成功！！これ使える！！」

初めて使うにもかかわらず、一発で成功させる。それどころかコツをつかんだソラはそれを使いこなし、突進して相手の中心にわざと入り込み技を発動させ、多くのシャドウを一気に倒していった。

一方グレイ

「アイスメイク、槍騎兵（ランス）！！」

槍を出現させて一気に数体のシャドウを倒していく。
しかし魔法の性質上、前方にしか飛ばないために後ろからシャドウ

に攻撃されてしまう。
だがグレイはその攻撃を振り向きもせず

「アイスメイク、盾（シールド）！」

氷の盾を出現させ、攻撃をはじく。それどころか盾を出現させたときにシャドウを巻き込み、背後にいたシャドウをも消し去った。

「はぁ、本当にキリないなァ……めんどくせぇ……」

氷で作った弓で何体ものシャドウを吹き飛ばし、剣で切り裂き、ハンマーで叩き潰す。
ものすごい速度で造形魔法を操りどんどんと数を減らしていった。

互いの敵ももう残り少ない。
二人は次々とシャドウをなぎ倒し、最後の一匹を倒す。そして自分の背後にある気配に向けソラはキーブレードを、グレイは氷で作った剣を突きつけた。

「「あ」」

突きつけた相手はソラとグレイ。
どうやら同時にシャドウを倒したきったようだ。

「オマエ、ずいぶんやるじゃねぇか」

「グレイこそ、すごい早さだった」

互いに賞賛の言葉を上げて、武器を下ろした。
そして

「「うへぇ……」」

二人してへたり込んだ。

グレイはへたりながらも考えていることがあった。

『ソラは訓練とかより、体で覚えるタイプ』と。つまり、結局は闘い続ければ自然と強くなる、ということだ。
本来ならば今日の出来事はいらなかったのかもしれない。

グレイはフッと笑いつつ、ソラのほうを見る。
視界に移ったのは

「何にやけてんだよ……」
なんとも残念そうな人を見る目をしたソラだった。
すこし、恥かしくなったグレイだった。

◇◇◇◇◇◇◇

ギルドに戻ると仕事から帰ってきたナツとルーシィが。
グレイはさっき出たシャドウのことをマスターに報告しに言ったのでこの場にはいない

「あ、ナツ！ルーシィ！」

「おう、ソラ！」

「あ、ソラ！どうだった？訓練」

「もうばっちり！明日からは仕事いけるよ！！」

「本当！？よかった！もうあたしナツは嫌よも～……無茶はするし、報酬断っちゃうし…」

報酬を断る仕事ってどうなの？

「でもソラが来たからにはこのチームも解散よ！ナツ」

「え？チーム？」

「うん。仕事仲間って感じかな。仕事も楽になるんだけど、ナツだからねぇ…。それに今回だって金髪なら誰でもよかったらしいし」

ナツのことをぼろくそに言うルーシィ

「なにいってんだ。俺はルーシィだから選んだんだぞ？いいやつだし」

「ナツ！？」

ナツの言葉にドキッとするルーシィ。顔を赤くし、少し照れている。しかしその顔の赤さはナツが続きを言うと性質を変えた

「それにソラも付いてくるし！！」

「そっちが目的か！！」

「えぇ！？俺！？」

ルーシィの頬の赤さは照れから怒りに変わった。

かくして、この三人は事実上チームとして動くことになった。

この面子なら何とかやっていきそうだな、そう、思ったソラだった。

第6話これって魔法なのかな？結局はただの斬撃だよね。（後書き）

オチが考えられない！！ネタが考え付かない！！どうしよう！！（笑）

そんなことより使用魔法紹介。
この小説ではソラのアビリィティを魔法として使っていきます（笑）
まぁ、ご了承ください

？スライドダッシュ

遠くの敵に近づきつつ突進攻撃を仕掛ける。ソラは半分移動にも使っている。
スライドダッシュという言葉を出さなかったのは「スライドダッシュ！」とか言いながら移動してもかっこ悪いだけだからです（笑）

？ラウンドブレイク

キーブレードに魔力を乗せ、周囲にいる敵に残檄を飛ばす魔法。
イメージとしてはＢＬＥＡＣＨの月牙天昇。まぁ、ゲームで使うラウンドブレイクの軌跡をもっと濃くした感じです。
乗せる魔力によっては威力も違います。たぶん。

こんな感じです。
感想待ってますね～♪

第七話鎧の女はきっとギルド1の有力者。独裁者みたいだ。（前書き）

今回はただのまったり＆ａｍｐ；話あまり進みません。あと自己解釈多々あり！！
気をつけて！！

感想等待って増すたい

第七話鎧の女はきっとギルド1の有力者。独裁者みたいだ。

◇◇◇◇◇◇◇

「ほら、ルーシィ早く仕事選べよ」

「前回はおいらたち勝手に決めちゃったから」

「なにいってるの！解散って言ったでしょ！！？」

「え、解散なのか？ルーシィ一人ぼっちだぞ？俺、一回もチームで動いたことないのに。それに俺と行くって言ってたのは嘘なのか？」

「うわ、ルーシィひどい。パートナーを簡単に捨てるなんて」

「なんであたしのせいなのかしらー！！！」

第七話

鎧の女はきっとギルド1の有力者。独裁者みたいだ。

少し時間をさかのぼり、妖精の尻尾内、朝

「へぇ……ギルドっていろんな仕事あるんだな」

「『魔法の腕輪さがし』に『呪われた杖の魔法解除』、『占星術で恋占い』！！？あたるのかしら！？」

ルーシィとソラはギルドの依頼板（リクエストボード）に来ていた。依頼板にはギルドに集められた仕事が張られている。仕事はさまざまで、討伐系から探索系、魔法学校の臨時教師などもある。
ナツは絶対討伐以外出来ないな、うん。

「気に入ったのがあったら私に言ってね。今日は総長（マスター）いないから」

「あれ？総長（マスター）どこいったんですか？」

いつも総長（マスター）がいる場所にはミラがいる。いつもならば総長（マスター）がタバコをくわえながらのほほん、としているのだが……

「定例会があるからしばらくいないのよぉ」

「テイレイカイ？なにそれ？」

「地方ギルドのマスターたちが集まって定期報告をするのよ。前に話したでしょ？総長（マスター）のお仕事。それの一つよ。でも今回は緊急召集みたい」

「緊急？」

「そう。ほら、ソラは知ってると思うけど、この間、『ギルドの裏で急に結界が出来たり、変なモンスターが出たりした』ってグレイが報告してきたのよ」

この前、というのはキーブレードの訓練をした日のことだ。

「あの黒い奴！！」

「そう！正確にはハートレスって言うらしいんだけど、その報告が他にもレビィたちからもあったみたい。それで総長（マスター）はみんなを招集したみたい。詳細不明の奴らだからきっと対策とかを考えてるんじゃないかな？」

「へぇ……大変ねぇ…」

少し、嫌そうな顔をしながらルーシィがうなずく。

「まぁ、どんな奴が出るか分からないし、力も分からないから、初心者の二人にはチームを組むことをお勧めするわよ」

「チームかぁ……」

ルーシィは軽くしかめっ面をしながら呻いている。

「でも、ナツたちと組んでるんでしょ？もちろん俺もだけど」

「そう……なのかなぁ？」

「とにかく、仕事のときは気をつけてね」

「「はーい」」

そういってミラはカウンターに戻っていった。

どちらにせよ、チームは組んでおいたほうがいいらしい。ルーシィとしてはナツと組むのは反対のようだ。昨日の仕事が引っかかっているらしい。金髪の女の人なら誰でもよかったとか、なんとか。一方ソラはナツなどと組むほうに賛成だった。理由なんて特にないが、会えて言うなら、『楽しそうだから』だろうか。どんなことでも楽しいほうが言いに決まってる

そう、思ったソラは、少しだけ頭をひねり、ルーシィをチームに参加させる為の作戦を考えた。

◇◇◇◇◇◇◇

「いいか？ナツ、ハッピー」

「おう」

「あい」

「もう一度作戦の確認な。ルーシィをチームに引き込むために、一芝居。ナツが仕事を誘えば多分ルーシィは断ろうとするから、そこで俺が一回一芝居。そこでハッピーはうまくルーシィを煽ってみてくれ」

ここに『ルーシィをチームに誘おう大作戦（？）』が決行された。
そして文章冒頭部に戻る。

そこには涙目でルーシィを見つめるソラ、非難する目のハッピー、にやけ面のナツが。
ルーシィをチームに誘うための作戦はなんとかうまくっているようだ。

「だ、大体ソラはナツがいれ平気でしょ！！？それにナツはソラが目当てなんだからソラと行けばいいじゃない！」

と、ルーシィ。しかしそんな言葉に

「俺、ルーシィと行きたかったんだけどな」

と、ソラ
ルーシィがピクン、反応する

「おいら、ルーシィがいたほうが安心できる」

と、ハッピー
ルーシィがピクピクっと反応する。

（これはいける！！ナツ、頼むよ！）

（おう！任せとけ！）

アイコンタクトで会話をするソラとナツ。この間約1秒

そして最後に

「俺は、ルーシィがいい奴だから選んだんだ」

ルーシィは

「それは前回聞いた！！」

つっこみを入れた。

「「「はぁ……」」」

「失敗かー」とため息を吐く男2人と一匹。それを見てルーシィは「うっ！」と、唸りを上げる。ここまで落ち込んでしまっているのをを見ているとなんとも居た堪れない気持ちになっていく。

そしてルーシィはついに

「……し、仕方ないわね。一回よ！一回だけ行動するけどここでへんなことしたらもう解散だからね！！」

と。しかし、ルーシィは気づいていない。男達が落ち込みつつ顔はにやけている事を。

ソラの作戦はこうだった。

一つ目は前に書いたように、ナツが仕事を誘って、ソラが揺さぶり、ハッピーが煽る。

しかしこれで失敗した場合、二つ目として『必要以上にがっかりして、ルーシィの良心を抉る』という作戦を立てていた。

「「「おっしゃぁ！！」」」

と喜びの声を挙げる2人と一匹。

ここに一つのチーム（仮）が確立した。

その光景を見ていたのはグレイと、ロキ。

「お前ら何やってるんだよ……」

「ルーシィはこっちで愛のチームを結成しようじゃないか」

グレイの言葉だけに反応したナツ

「あ？何でもいいじゃねぇか。この変態野郎」

「あぁ！！？誰が変態野郎だこらァ！！」

なぜか討論に。

「グレイ……服」

「あぁあ！！しまったぁ！！また忘れたぁ！！！」

なぜかパンツ一丁のグレイ。さっきまで服着てなかった？

そんなグレイをみてナツは

「はぁ、うぜぇ」
そしてグレイもそれにつっかかってた。
「あぁ？いまうぜぇつったかクソ炎！！」
「超うぜぇよ変態野郎！！」
……なんで殴り合いになるんだよ。
一方ロキのほうも
「ねー」
「何が！！？」
ロキとルーシィが話している
すぐ横でナツとグレイが喧嘩してるのによく気にせず会話できると思う。
「君って本当キレイだよね。サングラスを通してその美しさだ……肉眼で見たらきっと潰れちゃうな」
「潰せば？」

訂正。会話じゃなかった。一方的な意思疎通だった。
さらにロキは一度ルーシィの腰辺りを見たと思うと
「ごめん！僕達ここまでにしよう！！」
といって走っていってしまう。

「なぁ、ルーシィ、何か始まってたのか？
「んなわけないでしょ？ソラはああいう人になっちゃダメよ」
「ん～」

まぁ、ロキみたいに女の人侍らせたくないしね。
ってナツ達はいつまで喧嘩してるんだよ……

「あ、なんか戻ってきた」
「へ？」

ルーシィの声を聞いてその方向に目を向けるとそこにはさっき走り去ったロキ。

「ナツ！グレイ！まずいぞ！エルザが帰ってきた！！」

それだけ言うと、ロキは再び走って消えた。
何がしたかったんだろうか？

しかし、ナツとグレイのほうに目を向けるとがたがた震える二人。
どーしたんだよ？

そう、思うと同時に、ギルドの入り口からすごい音がした。

ズドォォン！！

そんな音がして、入り口の方向に目を向けると、そこにはキレイな
緋色の髪をもった女の人が
ギルド全体がざわつき始める

「うわ！エルザだ！帰ってきたのか！」

「すっげぇ、あんなでっけぇの倒したのか」

「うへぇ……」

いろいろな声が聞こえる。
すごい人なんだなぁ……あ、グレイがいってた人ってこの人かな？
今度剣教えてもらわなきゃ

そのエルザはというと

「お前たち、問題ばかり起こしているようだな。総長(マスター)が許しても私は許さんぞ」

といい、次々とギルドメンバーの注意をし始める

「カナ！なんて格好で呑んでいる！ワカバ！吸殻が落ちているぞ！ビジター踊るなら外で踊れ！ナブ！いい加減仕事しろ！！」

その後続くこと十数人一区切りしたあとに

「ふぅ、まったく世話が焼けるな。今日のところは何も言わないでおいてやろう」

あきらかにいろいろ言ってましたよ！！！

「風紀委員か何かかしら？」

「な、あれはすごい。学校にいるまじめな委員長みたい」

いたら怖い人だよ。思わずそう、つぶやくソラ。

「ところで、ナツとグレイはいるか？」

「あい」

エルザの問いかけにハッピーが迅速に答え、指（羽？）で指す。その先には

「や、やぁ、エルザ。おおお俺達、今日も仲良くやってるぜ……？」

「あ〝い」

手をがっしり組み、肩を組んだなぞの二人。
何者？この人たち。

「そうか、親友なら時にはケンカもするだろう。しかし私はそうやって仲良くしてるところを見るのが好きだぞ」

「あ、いや、いつも言ってっけど、親友ってわけじゃ……」

「あい」

いやだからこいつらだれだよ。

「ナツがハッピーみたいになってる！！」

ミラによると

「ナツもグレイもエルザのことが怖いのよ」

「えぇ！？」

だそうで。

図付きで説明してくれた。いつかのジャガイモの絵だ。どうやらあれはエルザとナツ、グレイの絵だったようだ。

「ナツはケンカを挑んでボコボコに、グレイは裸で歩いているところをボコボコに、ロキは口説いたら半殺しにされちゃったの」

ナツとグレイは、まぁ、同情するよ。だがロキ、お前のことは忘れないよ。

心の中でそうつぶやいたソラだった。

そして、このあと、エルザによってもたらされることはこれからのソラのギルド生活を大きく揺さぶることになる。

第七話鎧の女はきっとギルド1の有力者。独裁者みたいだ。（後書き）

正直続き考えてません（笑）どうしようかなぁ…

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7481x/

FAIRY TAIL　鍵の物語

2011年10月28日02時16分発行